

## 魅力ある県立高校づくり懇話会（第2回）議事録

- 1 日 時 平成24年11月15日（木曜日）14時～16時
- 2 場 所 埼玉県庁第2庁舎4階 教育委員会室
- 3 出席者 渋谷座長、藤池副座長、小杉委員、熊谷委員、中村委員、戸ヶ崎委員、  
工藤委員、山本委員、大出委員、佐藤委員
- 4 議 題  
(1)これまでの県立高校の活性化・特色化の取組について  
(県立高等学校の学校規模について事務局から説明)

座 長 事務局からの説明について何か質問があるか。

委 員 資料にある今後の市町村立中学校卒業者の見込みについて、平成25年度に  
私立中学校が4校開校すると思うが、その生徒数はどういう扱いになるのか。

事務局 この見込み数には私立及び国立中学校の卒業者は含まれていない。ただし、  
資料は平成30年度の数字まで示しているが、将来の見込みは現在の小学生数  
から想定している。従って、今後小学校卒業時に私立中学校へ進学した生徒の  
数によっては、将来の市町村立中学校卒業者数に影響が出る可能性はある。

座 長 現在までの施策についてどう受け止めるかという観点になると思うが、自由  
に発言して欲しい。

副座長 前回はどうしても都合がつかず欠席させていただいた。第1回会議における  
皆さんの御意見は議事録で拝見した。県の経営者協会の副会長を長くやっている  
こともあって、四者面談という学校の先生と生徒と保護者と私どもで面談を  
行う取組に毎年参加させていただいている。また、その関係で私の会社に高校  
の先生といった方々が研修に来られたりする。そんなふうにならぬいろいろな関  
わり合っていたこともあって、今回白羽の矢が立ったと思う。正直どれくらい  
お役にたてるか分からないが、企業から見た教育問題という視点で多少なりと  
もアドバイスができればと思っている。また、こちらも皆さんの御意見から高  
校教育の問題について勉強していきたいと思っている。副座長という肩書では  
あるが、議論に飛び込んで発言していきたい。

委 員 学校を活発にするにはこれだけの規模が必要という事務局からの説明だった  
が、生徒には家計が苦しいので自転車で通学できる範囲がいい、通学にお金がか  
からないほうがいいのかという感覚もあると思う。また、地元を離れたくないと  
いう地元志向もあると思う。学校の活性化とは別に、そういう子どもたちの学  
習権をどう保障するかについてはもう少し違う価値観があると思うが、その辺  
はどのようにバランスを考えているのか。

事務局 資料に旧通学区域が表記されているが、これは平成15年度まで設けていた

ものである。基本的には通学区の中で高校を選ぶものであり、隣接した学区は共通学区として行ける場合や、専門学科は全県一区という取扱いもしていたが、まさに委員お話の通学に係る費用の負担軽減というのがあったところである。

ところが、自分の通学区外の高校へ行きたいという声もあり、全国的な流れの中で埼玉県も比較的早い段階で全県一区という形にしたところである。結果、埼玉県は南北の交通の便は良いので、北から南に南下する傾向も生じている。選択の幅が広がったことで、行きたい学校に行ける希望が実現したという声が多いが、通学範囲の問題については、ぜひ現場の先生方のお話も伺いたい。

**委員** 家計の豊かな家庭ではあまり考えないだろうが、家計的に恵まれない子たちの選択は多分違ってくるのではないかと思うがどうか。

**委員** 自分の勤務する高校も、確かに今はかなり遠くから生徒がきている。ただ、全体的には全県一区になったことで、県南の方へ生徒がかなり流れている。かつては県南の高校に行けなかった地区でも、電車に乗ればすぐ大宮や浦和に行けるため新たな流れができています。自分の高校は進学校と言われているが、学力上位の層が県南の方に流れていると感じています。

もう一つ、先ほど委員から話のあった通学費用についてだが、前回の会議で最寄駅がない学校に勤務した話をしたが、その学校は駅と駅のちょうど真ん中に位置しており、バスを使うとバス代が300円掛かる。最初はバスで来る子もいるが、やはり費用がかかるということで自転車通学に変える生徒が多かった。経済的にはさほど厳しくない家庭が多かったが、それでも通学費用は負担になっていると思う。だから、経済的に厳しい子たちにとって、通学費用はさらに大きな問題になる。定期代を考えると自転車で通える高校を選ぶことになるが、10キロも15キロも自転車で通うのは問題ではないかを感じる。

**事務局** 通学区の廃止により、今まで通えなかった通学区から来る生徒が多い学校は、いわゆる進学校が多い。おそらく中学時代にそれなりに教育費を投下している経済的にある程度余裕がある家庭であり、費用がかかっても行きたい学校へという傾向があると思う。

**座長** 問題提起としては、複数の要素がからんでいると思う。近さを優先する生徒をどう見るか、また高等学校の適正規模はどの辺に落ち着くのか、多様性があるのか等、更に御意見をいただきたい。

**委員** 現在、3学級や4学級といった小規模の学校もある。前回も話をしたが、学校が無くなることは地域の元気が無くなるくらいの影響があると、以前勤務した学校で感じた。都市部にある本県であっても、地域から全く学校を無くすのではなく、地方のように分校でも残すべき学校は残すべきで、たとえ小規模校になってもそれは必要だと思う。それから、地域の中学生がどのような入学希望を持っているのかよく踏まえるべきだと思う。過去に再編されてできたある

学校は、今年10月1日の進路希望調査で定員の約7割しか希望が集まっていない。他の学校でも希望が少ないところがある。地域の状況を踏まえないとこうなってしまう。

**委員** 昨年度、中高一貫教育の検証会議に出させていただいたが、地域で連携型中高一貫教育をやっていたところでは、中学校から連携している高校に試験無しで入学できる。すると、一部の生徒は、誰でも行ける高校には行きたくないと地元以外の県立高校やスクールバスの出ている隣接地域の私立高校に行ってしまう。バスの費用は当然保護者の負担だが、それでも将来を考えて私立高校に進学させる状況が生じている。生徒が私立高校も含めた他地区の高校に行ってしまうことで、将来地域の核になる人間が居なくなると心配する声があった。そのような状況も踏まえると、学力向上等の取り組みとともに、第1回の会議でも発言したが、1クラス40人という数字について、地域の事情を考慮して30人にするとといった弾力的運用はできないかという気がしている。

**委員** 先月、本校でPTA役員経験者が集まる会合があったが「地元の高校に昔は色々な支援をしていたが、他地区から通ってくる生徒が増えてそういう意識が無くなってきている。」との指摘があった。「校長、どうしてなんだい。」と聞かれ私も即答できなかったのだが、さらに話を聞いてみると通学区が無くなってからの変化のようだ。学力的に上位の学校は他の地域からの流入が多くなっているという話が事務局からあったが、数字を持っている訳ではないが、旧第1通学区南は流入も多く、進学校以外の学校も地元以外の生徒が多くなってきているようだ。私の今いる地区は、かつては市役所に勤めている人は地元高校の出身者が圧倒的に多く、地域が「自分たちのまちの高校」という意識を持っていたが、状況が大きく変わってきているようだ。このように地域ごとの状況には相当偏りがでてしていると推測されるふしがあって、卒業者数全体の増減とは別に、地区によっては出ていく生徒と入ってくる生徒の数のバランスが崩れてきているのではないかと感じている。

**座長** 学校規模の話から、地域性にかかる論点の意見をいただいた。どの論点でも結構である。

**委員** 私は秩父地区にいたが、大体中学生が約1000人いる。県立高校の募集定員が約800人だが、流出が激しくて他の地域へ400人ほど流れている。1000人のうち400人が流出しているから、残り600人を取り合っていることになる。さらに、そこに私立高校が入ってきている。秩父地区には伝統のある学校が2つあってそこは何とか生徒を確保できるが、残る2校が少ない生徒を奪い合う構図になっている。

普通高校の生徒は、卒業後、進学などで東京に出ていくので、地元に着するのは実業高校の卒業生で、彼らが地域を支えている面がある。中学校の先生

方にはぜひ地元の学校にという話もしているが、地域の子は地域で育てるとい  
う意識を持っていかないと本当に過疎になってしまう現実がある。

**座長** そのような高校では、クラスを圧縮してでも存続するという話にならないか。

**委員** 以前、新聞を見ていたら、岩手県では1学年1クラスあるいは2クラスでも  
学校を存続させているとのことであった。財政的には厳しいと思うが、岩手県  
は広い地域に住民がいて通学の問題もあるため、そういう方策をとっているよ  
うだ。

**委員** 本校の生徒の8割は地元や近隣の地域から来ている。地元から離れたくない  
という子が圧倒的に多い。すぐ隣が東京都だが、東京に行きたいという子はほと  
んどいない。就職も地元でしたいと。今の話の流れからすれば意外かもしれない  
が、本校の生徒はそういう志向を持っている。また、地元以外の地域から来てい  
る子供達の中には、中学校時代に学校でトラブルを抱えていて、高校は違う地域へ  
行きたかったという生徒もいる。通学区がなくなったことには、そういうよい面  
もあると思う。

**座長** 全県一区の皆さんがご存じない一面もご指摘いただいた。その他どうか。

**副座長** やはり、家庭でみっともないからとりあえず高校に行ってくれと言うケース  
が多いのではないかと。子どももとりあえず行ってやるよと。だけど、結局勉強  
が嫌いだからと高校をやめてしまい、その結果、公立高校に限った話ではない  
が、10クラスあったのがゴールデンウィーク明けで1クラス消えて、夏休み  
で2クラス消えて、という話も聞く。

私自身の経験でも、前回ちょっと書面で意見を述べさせてもらったけれど、  
私の会社には独身寮があったので寮目当てで来る子が多かった。親の話を聞くと、  
親が言ってなんとか高校は入学させたが、本人がもう高校はいい、家から  
独立して厳しい社会で頑張りたいと言っていると。独身寮にいて独立した厳し  
い生活ができるかそもそも疑問があるが、そういう子は早熟だから大体付き合  
っている女の子がいる。だから、寮に入れば親から離れて女の子と遊べるとい  
う感覚でくるのが結構いるので、私はそういうことが一度でもあったら、夜中  
でも御両親を呼んでその場で連れて帰っていただくという誓約書を書いてもら  
っていたが、99%は3ヶ月もつか半年もつかというところであった。

若者のこういう状況がどこから生じるのか私もよくわからないけれど、やは  
り出会いなのだろう。最初は親から始まって、近所の子ども、そして人生で一  
番の転機は学校の先生との出会いかもしれない。小学校の低学年を見ていると、  
こんな子が大人になるとどうしてあんなことをやるのだろうと不思議に思うぐ  
らい全員が純粋である。

これも聞いた話であるが、ある中学校の周辺にちょっと値が張る新興住宅地  
ができた途端、急に学校の学力が上がったと。なぜかと言うとそれなりの値段

の家が買える家庭というのは、御両親もそれなりに良い教育を受け、それなりの収入を得ていて家庭もしっかりしている。すると、6年から8年ぐらいは近隣の学校の学力が急に上がるという。そういう話を聞くと、やはり家庭に原因があるのかと私は思う。学校は周囲の環境は選べないから、レベルの高い子が集まってくれば先生も教え甲斐があるだろうが、そうでない学校は教え甲斐がないから先生もやっぱりさぼっているのだろうか。

**事務局** この間、ある雑誌で、教員が非常に多忙であると言われているが果してそうなのかと投げかけている記事を読んだ。例えば進学指導をする、あるいは土曜日も授業をやる。すると保護者から感謝される。それは忙しい状態ではあるけれど、教員も満足感ややり甲斐があるのでそれは多忙とは感じないのではないかと。ところが、例えば生徒指導が難しい学校で、指導方法で保護者との意見が食い違って文句を言われ、対応する。同じように生徒のためにやっていることが、保護者や地域から感謝されず批判される。感謝されるためにやっている訳ではないが、そこに疲労感が出てくる。それが全体的な教員の多忙感につながっているのではないかという記事があった。手を抜いている教員はいないと思うが、何かやった時に充足感や満足感といったものが得られる環境は、教員を元気にする。教員が元気になれば、生徒や子どもたちも元気になるという良い相乗効果も出てくる。

**副座長** 昔は普通科を出た子より工業高校を卒業した子の方が、給料が高かったと思う。私は理工学部出身だが、初任給は文系の学生よりも大体1割から2割は高かった。だからみんな工学部に行きたがっていたのがいつの間にか逆転してしまっている。高校も普通科に行けない子が工業高校に行く状況になっていると聞く。

私のもう一つの会社はかつて大宮にあったが、少し前に群馬県に移転した。その際、高校生を大量に募集したら、当時とても景気が悪かったこともあり応募が殺到して非常にいい子を採用できた。今そこは50名弱が働いていて、これは塗装業としては大手の部類に入るが、約8割はそういう若い社員で占めている。ここ5、6年はみんな家庭を持つ年齢になり、結婚、出産ブームである。そういう自分の会社の社員を見てみると、手に職を付ける商業高校、工業高校をもう少し手厚くやった方がいいと思う。頭脳労働がやりたい子は頭を使って稼げばいいし、頭を使うよりも体を動かし汗をかく仕事で稼ぎたい人も、世の中には相当いる。今、そのバランスが本当におかしくなっていて、我々の業界では外国人を使わなければ仕事ができないぐらいの状況ができてしまっている。

それに、今は頭を使う道に進んでもなかなか就職できない。保護者も、お前のやりたいことが見つかるまではお父さんお母さんが食べさせてやるから頑張れと応援するが、そもそも適性がないことだってある。これは親の役割でもあ

るが、やはり頭を使う道に行くか体を使う道に行くかといったところは、高校の段階である程度の境目を付けてやる指導をしてあげないと、結果的に不幸だという気がしている。この考え方が違っているという批判も聞きたいが、どうして社会がこうなったのか私にはよく分からない。

**座長** 私もあまり勉強している訳ではないが、今の話を聞くと、一つモデルとして、ドイツとかイギリスの進学制度があると思う。これまで、適正学校規模や進学エリアの問題のお話もあったが、もし更に何かあればお願いしたい。

**委員** 高校進学率が約98%という現状があって、本当にそれが正しい状態なのかという思いもあるが、この現状を前提に考えていくと、中学校4年生のような感覚が出てくる。やはり高校である以上、我々教員としては高校としての勉強をするつもりで来てほしいが、そういう気持ちがない生徒が多い。とりあえず高校に行っておこう、あるいは親に高校に行けと言われたから、という中学校の延長の意識で高校に来る子がいる。そういう中学校4年生みたいな意識をよしとするのか。その延長として、今後、高校進学率が100%に近づくことが社会にとっていいことなのか。その辺で他の委員から御意見があればお聞かせいただければと思う。

**委員** 今のお話について、目的意識もなくとりあえず高校に行くという子は確かにいる。しかし一方で、今の社会に中卒の学歴で働ける仕事があるかといえば、家の家業を継ぐという子もいるが、実際にはまずほとんどない。だから高校に行かざるを得ない。そういう状況を考えると、勉強したくないという子にとっても、高校がほとんど唯一の受け皿なので、そのように高校側も観点を変更して考えてもらいたい。

もちろん学力的には厳しいだろうが、高校で進路指導やキャリア教育をやっただけ、そのような子どもたちが自分にあつたところで胸を張って生きられるようにして社会に出して欲しい。中学の段階でそれをやろうとしても現実にはなかなか厳しい。

**副座長** 工業高校でも普通科の連続のような感覚で入学してくる生徒がいるのか。

**委員** 工業高校で機械や電気を勉強したいと入って来る子も当然いる。そういう子は非常にやる気があって、様々な場面で活躍している。しかし、行くところがないから入れる高校ならどこでもよいという理由で入って来る子達もいる。

**副座長** 普通高校なら教室だけあればいいかもしれないが、工業高校は設備その他が必要であり、普通高校より金もかかるだろう。そういう学校にどこも行けない生徒が来るというのは違和感がある。

**委員** ちょうど今日から本校では三者面談が始まったが、目的意識を今の時点で明確に持っている子は、志望動機もはっきりしている。ただ、目的意識があまりなく、とりあえず普通科に行こうか、どこかに行ける学校はないかという意識

の子もかなりいる。そういう子は、高校入試の間際になってから専門的な勉強をしたいという気持ちもないのに、倍率の数字だけを見て専門高校に進学する場合も現にある。早いうちから目的意識を持ち、将来を考えて工業高校に進学した子は意欲的にやっていると思うが、動機が明確でなく入学した子は、専門高校で専門的技術や知識を勉強できてよかったという声を聞くこともあるが、指導はなかなか難しいと察する。

**座長** 確認であるが、そういった生徒は私立高校には行かないのか。

**委員** 行かない子が多い。経済的な状況もちろんあるが、それよりも私学は校則などが厳しいから公立の方がいいという感覚が強い。

**座長** 事務局に質問だが、今、6万何千人の中学3年生がいてほとんどが高校に行くが、県立高校と私立高校の比率はどうなっているのか。

**事務局** 今年の数値では、市立高校も含めた公立高校が約65%である。残りは25%が県内の私立高校、7%ぐらいが県外の私立高校という形になる。

**座長** 先ほど高等学校の役割についてお話いただいたが、他に行くところがないから受け皿として、という観点はいかにも消極的な理由に聞こえるが、他の委員の御意見はどうか。

**委員** 本校では志望動機がきちんとある生徒はほとんどいないが、高校に行かざるを得ない現状の中、高校で面倒を見てあげなければどうしようもない。中卒ではアルバイトもできない。高校に在籍しているからアルバイトの口も見つかるのが現実である。

所得の低い家庭の子どもたちにはいかに学習権を保障するかは大事な問題だと感じている。そういった子たちの面倒を見て、教育し、力をつける。それは県立高校の役割であると考えている。崩壊している家庭も少なくない中、やはり学校が最後の砦ではないだろうか。授業時間だけでも居場所を作ってあげて、人間関係の構築やコミュニケーション能力といった生きる力をきちんとつけさせることが非常に重要だと思ってやっている。

また、先ほど教員の多忙化の話があったが、いわゆる進学校に勤務したことがあるが非常に忙しかった。周囲の教員も勉強に部活に一生懸命だった。ただ、それは確かに多忙だったが満足はあった。結果が出るし、子どもたちも前向きだった。今あるのは多忙感である。教員はへとへとだ。頑張っても結果はなかなか出ないし、そもそも保護者が、子どもが高校に行くことを望んでおらず、高校に行かずに働いて欲しいと言う。現場の意見として、教員はやる気はあるし、必要な教育も受けておりポテンシャルは高いと思う。ただこれだけ課題が多いと、何をやったらいいのかどこから手をつけたらいいか分からないのが現状である。色々な子がいる中で起きることに対応していくことで精一杯という感覚が現場にはある。

それから、先ほど話のあった通学距離の問題であるが、定時制の場合は学校から遠い子は辞めていく。学校と自宅の距離と退学率は比例する。私が高校生だったころ、定時制の生徒はほとんどが車とバイクで通学していたが、今は自転車と歩きである。経済的に車やバイクは持てないし、電車も使えない。

私の理想を申し上げて申し訳ないが、小規模でよいので自転車で通える範囲に、地域に根差し課題を抱えている子どもたちの面倒を手厚く見てあげる学校があればと思う。うちの定時制は規模が大きくなかなか手が回らない部分もあるが、小規模であれば一人ひとりにきめ細かく対応でき、人間関係も作れるので、中退率ももっと減らせると思う。

**座長** 議論が非常に盛り上がっているところであるが、次の発言でいったん整理をしたいと思います。

**委員** 労働市場の状況は、間違いなく低学歴であればあるほど失業率が高いし、非正規雇用となる率も高い。日本の産業構造自体、中卒や途中で高校を辞めた人たちが就ける仕事がなくなってきており、その点を踏まえると高校教育は社会の一員になるための社会化機能として必須のものに変わってきていると思う。今、別の審議会で生活保護家庭にかかる議論をしているが、そこでも将来設計を考えるにあたって、若い人はまず高校卒業の資格を取ることが必須条件になる。社会の一員としての基本的なことを中学までで学ぶのが難しい以上、高校をそういう場所として位置づけることが必要ではないか。その観点からは、やはり通学が容易にできる圏内に、小規模でいいから社会化機能を果たせる高校がやはり必要ではないかと思う。

**座長** 今、発言して頂いている議題は、この十数年間の県の県立高校の施策をもとに色々と意見をいただくということだったが、途中からおのずと、近未来において県立高校はどういう風に打って出たらいいのか、課題はどこにあるのか、という話になっていたと思う。

**事務局** 一点、参考資料を追加させていただく。最近入手したもので、他県が作成した資料であるが、全国公立高等学校第1学年の募集状況である。埼玉県の学校規模の分布がどのような状況なのか、全国の状況と比較して確認できると思い、参考に配布させていただいた。また今後議論の際にお使いいただきたい。

## (2)現在の高校教育の課題について

(現在の高校教育の課題について事務局から説明)

**座長** 事務局からの説明に質問がなければ議論を継続したいと思います。

**委員** 今年8月に文部科学省から高校生を取り巻く状況が発表されている。それによると日本の高校生は、自分が社会に役立っているかというような自己肯定感

が低い傾向がある。例えば「私は価値ある人間だと思う」が、「全くそうだ」と言っているのは日本の7.5%に対して、アメリカは57%、中国は42%、韓国は20%となっている。国によって自己肯定の捉え方も違うだろうし、宗教観や社会、文化状況、歴史的背景もあるだろうが、こういう数字が出ている中で、自分は何ができるのかという自己肯定力の向上について、やはり学校でも色々と取り組んでいただきたい。そのためには、第1回会議で話があったNPOなどの外部の社会資源を利用したキャリア教育を導入し、将来のミスマッチを防ぐ一つ的手段として活用できないかと思う。今、キャリア教育というと例えばSSHといった進学が取組が多いが、産業界へのアプローチも含め幅広いキャリア教育をお願いしたいと思う。

**座長** 大変重要な問題である。私もその数字を見て、ずいぶん日本は差がついていると感じた。

**委員** キャリア教育を、やりたいことを決める教育と捉えるのは違うと考えている。今、社会参加、社会の一員として力のある自分を確認するプロセスが非常に大事だと言われている。かつては家庭の中に自分の役割があって、それこそお手伝いのレベルから始まると思うが、自分の力で何か人の役に立つという経験をして、成長過程で自分が認められるプロセスがあったが、それがどんどん小さくなっていった。そこで、社会の一員として子どもが力を発揮する機会を幼少期から作っていくべきではないかという議論や動きが出てきた。キャリア教育もその一環だと思う。自分自身が社会の一員であり、自分に社会を変えていく、人のために何かできる力があるのだと確認した先に自分の生き方が見えてきて、職業を通じ社会に参加するプロセスにつながっていく。

他の委員の発言のとおりキャリア教育は非常に大事であるし、幅広く考えていかなければならない。キャリア教育を進める上で、社会参加のプロセスこそがもっとも重要であり、例えば学校には生徒会の自治という形で子ども達が力を発揮する場所があるが、そういう機会をどう広げていくか。さらには、学校の自治だけでなく、社会の、産業界との接続の中で自分の力を発揮できるような機会を作っていくことが大切だと思う。

埼玉県経営者協会は非常にいいことをやられている。四者面談では企業の目が入るので、生徒も社会とはそういうところかと視野が広がり、自分もその一員だと確認できる。これは社会参加の第一歩であり、正にキャリア教育だと思う。ここからさらに、職業体験やボランティアなど体験の要素を教育プログラムに入れていく。産業界の力を借りながら、機会を広げ、体験する場所を広げ、という蓄積を進めていく。教育プログラムだけで完結する話ではないが、今この会議でできることで考えていくなれば、そのような形のキャリア教育をぜひ教育プログラムに導入していただきたいと思う。

**副座長** 知り合いに有名なピアニストがいる。彼はピアニストになるために、小さい時から毎日16～17時間ピアノを弾いていた。しかし、何の目的もない子は、こっちへあっちへと余計な回り道もするだろう。私は、回り道をなるべくしないで、無駄な努力をせずすむように、最短距離で本命に向かって努力すればいいようにしてあげるのがよいと思っている。

四者面談をやって20年近くなるが、私は面談では一貫して、自分の好きなことをやるのが一番大事だと言っている。先ほどのピアニストの子は、子どもの頃何が嫌だったかと言うと、毎日十何時間もピアノのレッスンをしなければいけないのに、なぜ学校で蛙のお腹を解剖しなければいけないのかと。だから、好きなことを家庭や学校が発見してやる、なるべく早く見つけてやることは非常に大事だと思う。

募金をやる時、日本の学校では、先生が今日の当番はあなただから募金の袋を配ってくださいと言う。すると、当番の子がいやいや袋を配って、みんな明日100円持ってきなさいと言う。これがアメリカだと明日は募金で100円持ってきなさい。ただし、お母さんに言って、必ず何か仕事を与えてもらいなさい。その報償として100円をもらって持ってきてくださいと。袋の配り方も、募金の袋を配ってくれるボランティアは誰がいるかなというのと、全員がわっと手を上げて指名された子が意気揚々と配る。言われていやいややるのと、役割を与えてもらって意気揚々とやるのでは全然違うのではないか。

どうもどの学校も1から10まで同じことをやっている気がする。様々なレベルの人がいるのだから、ついていけない子は飽きてしまうだろう。最低限これはやらなければだめというある程度の形があれば、細かい知識はどうでもいいと思うのだが、実際問題、今の教育はそうなってしまう。なぜかと言うと受験は落とさなければいけないから、下田にペリーが来た時、帆船と蒸気船が何隻と何隻なんて馬鹿なことまで試験にでてしまう。それが将来どれくらい役に立つのか。暗記するだけならそれはコンピュータだ。教えたものは出てくるが、教えてもらわないものは出てこないというのは人間ではない。そういった観点から教育を変えていかないといけない。好きなことに応じて、クラスなどを分けてやっていくやり方でいいと思う。嫌いなものをずるずるやって高校を卒業しても、アルファベットの小文字のbとdが分からない大学生がいるという冗談みたいな話が現実にある。

**座長** キャリア教育についてずっと議論してきたが、やはりキャリア教育は狭く捉えるものではなく、色々な工夫をする余地があると考え。私もあの四者面談は非常に画期的であるし、粘り強くやられていると思っている。

**副座長** 四者面談をやることで、生徒のあの方向に行こうという気持ちが明確になる。通知表に一つしか5がない子はその分野を選べばよい。私はそう指導している。

逆にオール5の子は困る。何でもできる分、何をやったらいいか分からないから。ただし、オール5の子は何をやるか決まりさえすればどんな選択もできる。

**委員** 社会的自立について言えば、体験活動やボランティア活動といった具体的な活動を通し、周囲から感謝されるなどの経験をすることで成就感などを味わうことが必要だと思う。既に取り組んでいるとは思いますが、インターンシップなどをカリキュラムの中にきちんと位置づけ、ある程度長い時間取り入れて欲しいと思う。例えば、商業高校の生徒がお店を作って販売している様子がテレビで紹介されていて、いきいきとやっている姿を拝見したこともあるが、インターンシップで色々なことを体験し学ぶことが、将来の職業選択につながっていくと考える。

**委員** 学力向上についてだが、過日本校で、卒業生たちを呼んで、中学3年生を対象に、今通っている高校の話をしてもらった。そこで卒業生が自分の高校の何を自慢していたかという「私の学校は授業がとっても魅力的です。」という内容が非常に多く、それがとても印象的だった。やはり、日々の授業が分かって楽しいと生徒が感じているかどうかは、昔も今も学力向上や生徒指導の観点からとても重要だと思う。「教師は授業で勝負する」という言葉は決して忘れてはならない。そのためには、教員の授業力を向上させる施策をどんどん進めていかなければいけない。ただ、中学校にも言えるのだが、高校も教科の専門性という名の下に、授業力向上の取組が教師個人に委ねられていないか、という危惧がある。教科の枠を超え、学校全体で授業力を向上させる取組として、中学校では研修主任がほぼ全部の学校で設置されていて、また大多数の中学校が毎年何らかの研究委嘱を受けているが、高校でも学校としての研修体制をしっかりと作ることが、授業力の向上はもちろん、ひいては学力向上、そして学校の特色づくりにもつながっていくと思う。様々な知の外部リソースを積極的に活かす取組と並行して、日々の授業を充実させるという地道な活動で自分たちの足元を固めていくことが大切だと思っている。

さらに、力のある子をどんどん伸ばす方策も、現在でもSSHなど様々な取組をやっているが、今後は国際バカロレア制度などの大胆な取組をやっていると思う。また、他県ではコミュニティースクールの導入を進めている例もあるので、地域に根差す学校づくりという点ではそれも一つの方策だと思う。

**座長** 貴重な示唆をいただいた。その他何かあるか。

**委員** 私の高校はほとんどの生徒が大学進学を希望しているが、キャリア教育では、学校のOBに色々な分野で活躍されている方がいるので、そういった方を呼んで話を聞くことや、他にも生徒が大学に行って授業を聴いたり、大学の先生に授業をやっていただいたりもしている。自分が将来、どのような方向に進み、どのように社会とつながっていくのかを考えさせる取組を色々やっているが、

どうしてもどの大学に何人入ったかという数字で評価されてしまう部分があり、非常に苦しいところがある。大学に入る事だけが目標ではないが、周囲がそこで学校を評価してしまうため、生徒も教員も苦しんでいるのが実態だと思う。そういう苦しさがあるが、どういう生き方をしていくのかという基本、根本は絶対に外してはいけないところなので、色々と働きかけをしながら、子どもたちのやる気、動機づけに結びつけている。

**委員** 知識や技術を学力と考える人が多いが、実は産業界では思考力や判断力といったものを重視している。そのことに早く気が付かないといけない。私の学校はオーストラリアに姉妹校があるが、この間、その学校の生徒が来たので何を勉強しているのか聞いたら、ビジネスコースでビジネスを勉強している、具体的にはアカウントをやっていると。では、どのような授業をやっているのか聞いたら、事例を元にみんなで議論をしていると。日本の商業高校の簿記は、検定中心で暗記主体の勉強をしている。その姉妹校の先生や生徒は、日本の学校は答えをすぐ先生が教えてしまうと言っていた。職業高校である以上、実学としてのこれから生きていく上で活用できる知識を教えていかなければならない。教員にも、暗記的な学習はもう通用しない、生きた教育をしてくださいと常々言っている。

私の学校で大学に進学する生徒は、大学に入ることが目標ではなく、将来、税理士になる、公認会計士になるという目標を持って大学に行っている。専門高校は、入学してからしっかりとした目標を持った生徒に育っていくのが特徴ではないかと思う。

**委員** 私の学校は工業高校なので、キャリア教育の必要性は強く感じている。本校もインターンシップを数年前から始めており、以前は希望者が10人程度だったが、それではいけないということで参加者を増やす取組を進め、徐々に人数も増え、昨年度からは2年生全員が参加するようになった。すると、市内企業への就職率が以前は20数%だったのが、今は40数%になり半分近くが市内企業に就職できるようになった。生徒が市内の企業を知る、市内の企業も高校生を知る、そういう場が成立した結果だと思うが、このように非常に状況が良くなっているため、インターンシップ等の体験的な学習は非常に重要だと実感している。

もう一つ、本校のような専門高校では、生徒は実習の授業では本当にいきいきとしている。座学で寝ている者も実習は目が輝いていて、それは誰が見ても分かるくらい違う。やはり実習を通して生徒はどんどん成長していく。しかし、どうしても座学でやらなければいけないものや、あるいは普通科目を何単位やらなければいけないという制約もあるので、例えば、生徒や地域に合わせて、学校の裁量で授業の時間数や単位の設定ができる仕組みがあったら有難い。ぜ

ひ今後、何かの機会に実現してくれればと思っている。

**委員** 大変いい唆や方向性が多くあったが、上手く整理していくと3つか4つぐらいになると思う。事務局には議事録の作成をよろしく願いたい。

**副座長** 専門高校に行くことが、下に見られるのではなく上に見られないといけない。専門高校では一般教育はいらないのだというぐらい思い切って割り切って育てていただいて、卒業したら今度は私の会社に来て、社会の役に立つぞという気概を持って働いてもらいたいと思う。自分が理工学部出身ということもあるが、普通高校に行けないから専門高校へ行くなんてことは、私としては絶対に許せない。

それから定時制の先生方は本当に大変だと思う。私も、費用を掛け、然るべきリスクもとって社員を育てても、本人の考えがどうしようもなく、全然ものにならないという経験を何度もした。めげないで、一つ願いたい。

**委員** これまで厳しい環境にいる子ども達の話をしていただいたが、私はエリート教育もまた必要だと思っている。部活動を通じて有名私立大学の附属高校と交流があるが、今は附属高校の生徒も系列の大学に進学せず外国の大学に行ってしまうそうだ。公立高校でも外国の大学に入学できるような教育をやるべきである。私が担当している定時制の生徒は汗をかくことでお金を稼ぐ仕事に就く者がほとんどだが、社会全体で見れば、それは一方に頭を使って働く人がいるから成り立っている。そういう観点から、知識人の育成も願いたい。

**副座長** 同感である。ぜひ願いたい。

**座長** 最後の、思い切って力のある子を伸ばそうという意見は、他の委員からも発言があったところだと思う。本日も大変充実した議論であった。

(以上)